

ずいそう

島の暮らしに息づく唄と祭り

速水研太



視界いっぱいに広がる青い海。港を出て意外と激しく揺れる船の窓から、すぐに見えてくるお盆を伏せたような平たい島影。

島の港に船が着き、心なしか上機嫌な現地の人達と一緒におり、集落への道を歩いていくと、集落のあちこちで、踊りの練習をしている風景に出会います。

沖縄、八重山諸島の竹富島で、毎年旧暦9～10月に行われる、種取祭を見るために訪れた時の風景です(写真-1)。



写真-1

ダイビングで訪れた沖縄にはまり、東京に帰ってからも島の雰囲気を感じたいと思い始めた三線は、その音色になんとも癒されます。一口に沖縄といっても、沖縄本島と宮古地方、八重山地方では全くと言っていいほど方言も唄も違います。私は特に八重山地方の唄に惹かれ、以降何度も足を運んでいます。

石垣島の少し南に位置する島が竹富島で、重要伝統



写真-2

的建造物群保存地区にも指定された赤瓦の家並みが有名(写真-2)ですが、昔からの信仰や祭りが今も生活に根付いています。島では一年を通じて、さまざまな祭りが行われますが、中でも、1年の豊作を祈願して行われる最大の祭りが種取祭です(写真-3)。祭りは9日間にわたり、そのうち7、8日目にされる、奉納芸能の日は、朝から夜通し、唄と踊りで島全体が包まれます。以前から行ってみたいと思っていましたが、奉納芸能は旧暦9～10月の庚寅、辛卯の日と決められていて、その日が休日にあたった年ようやく訪れることができました。



写真-3

奉納芸能の日は、早朝まだ暗い中、世持御嶽(御嶽とは神が依るとされる場所で、沖縄の各島には数多くある)での、神司の祈願から静かに始まります。その後、集落の長の家まで古老たちの参詣の行列が進みます。行列の後をついていくと、そこかしこに島人が立ち、行列に向かい唄いながらおじぎをする、その振る舞い自体が既に芸能のような優雅な動きで驚きます。

参詣の行列が御嶽に帰ってくると、その後は昼から日暮れまで、庭の芸能・舞台の芸能が延々と続き、唄三線にあわせ、時に優雅で厳かな、時にユーモラスな演目が繰り広げられます(写真-4)。

さらに、日が暮れてからは、集落内の家々を回る「ユークイ(世乞い)」が始まります。道唄を唄いながら朝まで、家々をまわり各家で踊ります。

朝から晩どころか次の朝までの祭りが、しかも2日間続き、まさにこの時は島全体が祭り一色になるのです。



写真—4

八重山の島では、他にも、各島で、夏の豊年祭、秋の結願祭や節祭など、さまざまな祭りがああります。

黒島の豊年祭も面白く、砂浜で行われる踊りや、手漕ぎ船のハーリーなど、とても絵になります。この島は人よりも牛の方が多いと言われるほどで、人口は200人程度。泊まった民宿の若旦那が、ハーリーの船頭で出ていたり、まさに島人総出なように感じます。

まだまだ行ったことのない祭りも多いので、これからも少しずつ訪ねていきたいと思ひます(写真—5,6)。



写真—5



写真—6

八重山の有名な唄にトゥバラマという唄があります。とても美しいメロディーにのせて、唄う人がそれぞれの思いで歌詞をつくったり選んだりするのですが、毎年中秋の名月の晩には、石垣島でトゥバラマ

大会があり、満月の下、島の内外から来た三線唄者達が歌声を競います。

八重山の唄の特徴として裏声を使わないことがあります。地声でしかもかなり高い音程を使うので、離れたところまで唄が届きます。八重山の唄を聞いていると、畑や海辺で遠くの人まで想いが届くように唄っている人のイメージが浮かびます。

島にとって、祭りは重要で神聖なものです。舞台の出待ちをしている島人達の顔も真剣で、かつ晴れがましさがあります。おそらくこのために何か月も前から練習を重ねてきているのでしょう。唄や芸能が、生活や信仰と一体となって、息づいている様は、とてもうらやましいものがあります。おそらく、離島の限られた土地で、ぎりぎりの生活をしていく中での自然や祖先への切実な祈り、共同体を成立させていくための結びつき等が形となって表出したものが沖縄の唄や踊りであり、そこに心響くものがあると思ひます。

これは沖縄だけでなく、日本のどの地方にもあるものと思ひます。集落の美しさだけでなく、そこに暮らす人々の生活・歴史・共同体としてのつながりもあわせもつ、しなやかな、まちやむらが、多様性を持って日本各地にあり続けられるといいな、と思ひます。

.....



写真—7

「ヒーヤ、サッサ！」夜の庭に響き渡る掛け声と、銅鑼の音。掛け声にあわせ、唄い、踊る人々。白砂の道を唄いながら、歩いていく島人の列。そして東の空が少しずつ明るくなってくる…。

いつまでもこの風景が残っていきますように。

—はやみ けんた (株)竹中工務店 開発計画本部—